

— 原 著 —

破骨細胞様巨細胞を伴う乳癌の1例

広島大学第二外科

水沼 和之・片岡 健・杉 桂二
角舎 学行・高橋 護・春田 るみ
土肥 雪彦

同 附属病院病理部

尾田 三世・小川 勝成

同 第二病理

有広 光司

I. はじめに

破骨細胞様巨細胞を伴う腫瘍は骨軟骨部腫瘍ではよく知られているが、乳癌においては本邦ではまだ30余例の報告しかなくきわめてまれである。今回、われわれは多数の破骨細胞様巨細胞を伴う乳癌の1例を経験したので報告する。

II. 症 例

患者：42歳，女性，未婚

主 訴：右乳腺腫瘍

既往歴，家族歴：特記すべきことなし

現病歴：平成9年夏頃より右乳腺腫瘍を自覚するも放置，平成10年近医受診し，穿刺吸引細胞診にてclass IIIの診断にて，同年2月26日当科紹介となる。

受診時現症：右乳房CA領域に3cm大の弾性硬，境界明瞭な腫瘍を触知した。マンモグラフィーで同部位に一致した3.8×2.5cm大の腫瘍影を認め，超音波にては，辺縁不整で内部不均一な腫瘍像を認めた。(写真1)(写真2)

穿刺吸引細胞診所見：N/C比の高い腫瘍細胞が集塊を形成し，強拡大では，細粒状から微細顆粒状のクロマチン像を示していた。以上より腺癌が強く疑われた。また，周囲に多核の破骨細胞様巨細胞が認められた。(写真3)

手術所見，切除標本所見：平成10年3月19日術中生検を行い，乳癌の診断のもと，非定型的乳房切除術を行った。(t2n1a m0, stage II)

なお摘出した腫瘍は，4.8×2.5cm大の比較的境界明瞭で，辺縁赤褐色，内部淡黄色充実性であった。

病理組織学的所見：大小不整な腫瘍細胞が充実性胞巣を形成し，類円形の管腔を伴って脂肪織に浸潤して

いた。腫瘍細胞は，大型でクロマチンの粗な異型核を伴っており，充実腺管癌と診断した。また，腫瘍内，管腔内には巨細胞を認めた。(写真4)

免疫組織学的所見：破骨細胞様巨細胞は，上皮性マーカーであるEMAには染色されず，組織球，単球



写真1 マンモグラフィー所見
右乳房CA領域に3.8×2.5cm大の腫瘍影を認める。

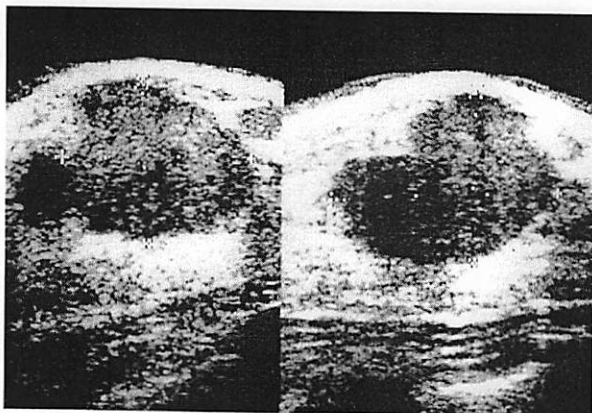


写真2 超音波検査所見
辺縁不整で内部不均一な腫瘍像を認める。

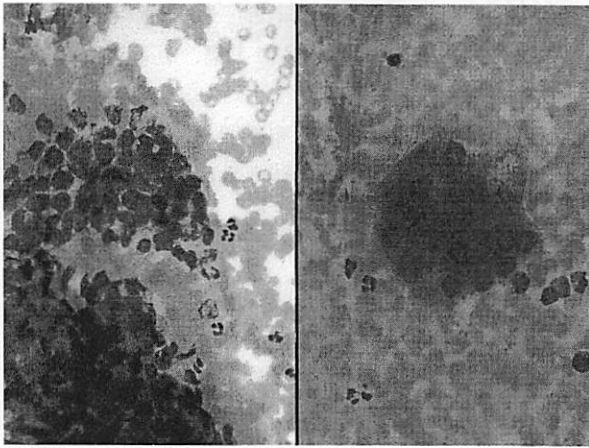


写真3 穿刺吸引細胞診 (May-Giemsa 染色)
(写真左) N/C 比の高い腫瘍細胞が集塊を形成している (中拡大)。(写真右) 周囲に多核巨細胞を認める (強拡大)。

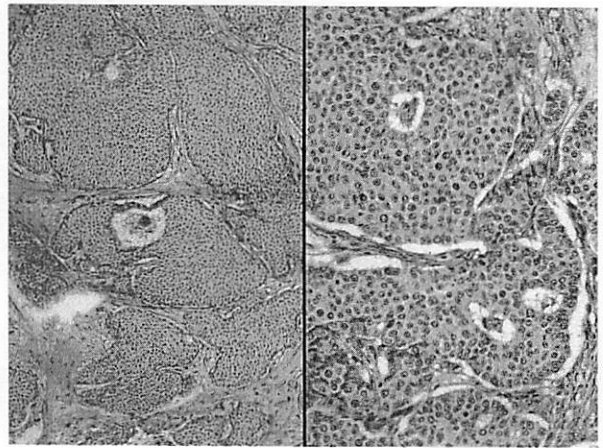


写真4 組織像
(写真左) 大小不整な腫瘍細胞が充実性包巣を形成し、類円形の管腔を伴って脂肪織に浸潤している (弱拡大)。(写真右) 腫瘍内、管腔内には破骨細胞様巨細胞を認める (中拡大)。

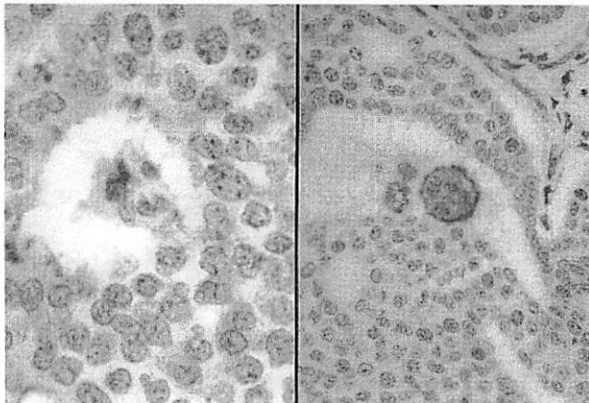


写真5 免疫組織染色 (強拡大)
破骨細胞様巨細胞は上皮性マーカーである EMA には染色されず (写真左), 組織球, 単球のマーカーである CD68 には濃染した (写真右)。

のマーカーである CD68 に濃染したことより, 組織球, 単球系細胞由来の可能性が強く考えられた。(写真5)

III. 考 察

乳腺腫瘍組織中に破骨細胞様巨細胞が出現することはきわめてまれである。破骨細胞様巨細胞を伴う乳腺腫瘍には, 1) 腫瘍成分が未分化な肉腫様パターンを示し, 高率に骨や軟骨化生を伴う癌 (metaplastic carcinoma with osteoclast-like giant cells), 2) 比較的分化型の腺癌に伴うもので, 肉腫成分や骨, 軟骨化生のないもの (carcinoma with reactive stromal giant cells), 3) 上皮性腫瘍成分がなく, 骨の巨細胞腫に類似性が求められるもの (extraskelatal osteoclastoma), の3つが知られている¹⁾⁻³⁾。本症例

は, 腫瘍成分が未分化でなく骨や軟骨化生を伴わないことから, 2) に相当すると考えられる。2) に該当する本邦報告例⁴⁾ は自験例を含め35例であり, これらによれば, 年齢は40歳代に多く, 組織型は乳頭腺管癌13例, 硬癌11例, 充実腺管癌7例, その他, 不明が4例であった。また, 腫瘍径は 2cm 以下が半数を占めており, 早期癌が多いことから一般に予後は良好である。

黒住ら⁵⁾ は巨細胞は上皮性マーカーである EMA, CEA, pankeratin に対しては陰性であったが, 間葉系細胞のマーカーである vimentin と macrophage のマーカーである CD68 に対しては陽性を示したことより巨細胞の起源としては組織球に由来するものと推測されたと述べている。自験例においても EMA 陰性, CD68 陽性であり組織球, 単球系細胞由来の可能性が強く示唆された。

今後, 更なる症例の蓄積により, 本症例の如く乳腺組織内への破骨細胞様巨細胞の出現の臨床病理学的意義の解明も進んでくるものと考えられる。

結 語

破骨細胞様巨細胞を伴う乳癌の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告した。

文 献

- 1) Wagotz ES, Norris HJ: Metaplastic carcinoma of the breast: V. Metastatic carcinoma with osteoclastic giant cells. *Hum Pathol* 21: 1142-1150, 1990.

- 2) Agnantis NT, Rosen PP : Mammary carcinoma with osteoclast-like giant cells : A study of eight cases with follow-up data. *Am J Clin Pathol* 72 : 383-389, 1979.
- 3) Lucas JG, Sharma HM, O' Toole RV : Unusual giant cell tumor arising in a male breast. *Hum Pathol* 12 : 840-844, 1981.
- 4) 柄松章司, 安藤重満, 三井 章・他 : 破骨様巨細胞の出現を伴った乳癌の1例. 乳癌の臨 12 : 531-535, 1997.
- 5) 黒住昌史, 西村俊信, 栗原照昌・他 : 破骨細胞に類似した多核巨細胞を伴う乳癌の免疫組織化学的検討. 乳癌の臨 7 : 69-74, 1992.